

台湾におけるコンブの流通及び消費構造に関する研究

董 雅 鳳

(共生農業資源経済学講座・水産資源経営学分野)

目的、課題

台湾ではコンブ (Japanese kelp; Konbu) の生産がないにもかかわらず、国民当たりの消費量 (食用) は世界一であろうと思われる。このため、台湾は生産国である中国、及び日本にとって重要な輸出先となっている。台湾がコンブ消費圏であるのは歴史的な経緯のあることであり、また消費や流通の形態も独自のものがある。しかしながら、台湾においてメジャーなコンブ市場の形成や流通、消費に関する考究は、戦前における調査分析を除いてはこれまでほとんど皆無の状況である。

本論文では台湾におけるコンブ市場形成の歴史考察と需要の実態解明を行うと共に、近年台湾のコンブ市場を席卷することとなった中国産養殖コンブの生産・流通動向、並びに日本産コンブの輸入縮減についても把握し、台湾におけるコンブ市場形成の特質について究明することを目的とする。

論文の構成と研究方法

本論文の構成は以下の通りである

- 序 章 研究の背景説明と課題—台湾におけるコンブ市場の展開—
- 第1章 コンブ貿易の史的展開—日中台のコンブ貿易概史—
- 第2章 中国におけるコンブ養殖の展開と輸出
- 第3章 台湾市場における日本産及び中国産コンブの流通動向
- 第4章 台湾市場におけるコンブの消費形態—実態調査—
- 第5章 総 括

本研究において、内外における資料・文献調査、並びに現地調査を実施した。前者は主に歴史的資料の文献の発掘と収集に時間を費やした。重要な資料や統計は北海道大学水産学部所蔵のもの、及び台湾の成功大学図書館所蔵のものであった。後者は主に台湾における現地調査であり、貿易商・卸売商等の元卸や中間業者、及び朝市・夕市・夜市・一般の店・量販店・百貨店等の末端業者を対象として、資料収集と併せこれまで5回に及ぶ現地聞き取り調査を実施した。

考察と結論

台湾におけるコンブの食習慣と消費市場形成は明朝末・清朝初期におけるコンブ朝貢貿易の開始を契機としたようである。そして、いわゆる「コンブ・ロード」の形成の中でかなり早期に今日の「醤油煮」に代表されるようなコンブ食文化が生まれた。長期にわたり日本 (北海道) の乾燥コンブ (ナガコンブ) が供給されてきたが、1990年代において、顕著な生産力拡大を遂げた中国産養殖コンブ (半加工の塩漬形態) が中台の交易拡大の趨勢に乗る形でコンブ市場を支配するという、ダイナミックな変動が見られた。結論として、①長い歴史の中で形成された台湾のコンブ消費形態は「屋台」を中心とする朝市・夕市・夜市などの市場 (いちば) での大衆消費と一体化しつつ定番化してきた、②いわゆる業務用需要が圧倒的であることが、安価で簡便な塩漬コンブの形態で輸入された中国産養殖コンブの著しい市場浸透を助長したと思われる、③台湾における菜食主義、素食 (精進) の習慣の存在が国内市場の多様化、差別化をもたらしており、このことが相対的に高価格の日本産コンブの流通と消費に関し一定の継続性を保証してきた、等の諸点が把握された。